本所

〔廻國雜記〕淺草といへる所にとまりて、庭に殘れる草花を見て、

冬の色はまだ淺草のうら枯に秋の霜をものこす庭かな

〔南向茶話〕問曰、本庄を本所とも相記し候、いづれか正字ならん、梅若の來由に付て舊地と被存候、如何御聞つたへも候哉、

答曰、本庄は舊名なるよし、武州熊谷先にも同名あり、元祿年中有故て本所と相改むと云、梅若跡之儀、近年尾州人緣起を相記し、其記には、上古圓融院之御治世之事跡とすといへども、愚按に、足利家之時代亂世之頃之事跡なるべし、○中略文明之頃之五山僧横川叟景三の詩集にも、梅若童子悼といへる詩あれば、其頃の事にや、

〔新編江戸志十一〕本所

里談に云、往古は本庄と云るよしを、元祿の比、本庄家盛んなりし時より、本所と改けるよしみゆ、

深川

〔新編江戸志十一〕深河

むかしは鱘河とも書り、往古は海邊にして、鱘なども多くありしにや、舊記も、深河の地名有、未其據を得ず、

〔御府內備考一百一十一〕深川は、慶長の頃、勢州の人、深川八郎右衞門といひしが、此地に來りて新墾せしまゝに、たゞちにその氏をもて地の名とすると云傳ふ、事は末に出す、元町の呈書、及猿江町泉養寺の記錄に詳なり、泉養寺は即八郎右衞門の開基せる寺にて、昔は深川元町の處に在しといふ、江戸志に、昔は鱘河と書て、鱘多くおりし地なりといへるは、おそらくは無稽の說なるべし、此深川と稱するも、もとはわづかなる村なりしが、後に市店屋敷など多く出來て、深川町と改められ、又何の比よりか、此邊の總名とはなれり、今みるところをもていはゞ、東西も南北も、そのわたり凡二十四五丁、南は海岸に邊し、北は六間堀森下丁、富川丁、西丁、猿江丁、大島丁に及び、東は大抵十間川十万坪の東を流れ、亀戸、柳島の間へ通る川なり、に